

そうこうして居る間に東がジーーと白んで來たら、コトツと一人も來ん様になつたで、ア、賊も我身が恐ろしなつて夜が明けたら一人も來ん様になつたわい、然し金は何程持て歸たしらんと思ふて金藏へ這入つて調べて見たが、あかんもんやで千兩箱がタツタ七十五しか減てないのや、賊も慾の無いものやないかいな、アハ、、、、——」

「へ——エ、千兩箱が七十五とは、是れは恐れ入りますなア」

「いや是れも話のついでぢやが、此方へ來る十日程前の事や、女中が無性しよつて旦さん漬物の重石が丸ふて持悪いので何ぞ持宜い物と云ふたので、フツと思ひ付て千兩箱を十投出して置いたら夕方になると一つづゝ減るので不思議な事が有ると思ふて何で減るのや、減る筈や出人の者が歸りに一ツづゝ捨て歸り依るねんが、錢の無い者は浅間あさまい心に成るもんやないかいな——アハ、、、、」

「へ——ン、漬物の重石が千兩箱とは恐入りました、時に旦さん、其のお言葉に附込むのや御座りませんが、私の方も斯んな小さな宿屋を仕て居まして、宿屋だけでは會計が立ませんので此の頃は彼方此方の世話をさして貰ふて居りますが、今度高津へ富が出來まして其の富の札を賣して貰ふて居ますが日が明日になりまして一枚残りましたんやが、なんと御無理を願へん物で御座りますやろか、旦さんの様な勢の宜い方には當ると思ひますが、是で御座ります、子の千三百六十五番、なんと宜い番號ですが一つお願ひが出來ませんもんだすやろか」

「フム、夫れは一體如何なるのや」

「へイ、一番が千兩、二番が五百兩、三番が三百兩と云ふ籤が御座ります」

「そうすると何か、私に一番が當つたら千兩さへ上げたらそれで宜えのか」

「エ——エ」

「イヤ、千兩さへ出せば済むのじやろ」

「マア旦さん何を仰言しやる、千兩と云ふのは向方から呉れますねがな」

「何ぢや呉れるのかく、いや僅か千兩位の金邪魔になる、モウそらおいとく

「旦さんでは千兩位とおつしやるが、我々では千兩と申しましたら大した物で、何と御無體が願へんもんでしようか」

「そら一體何程上げたら宜いのぢや」

「一步で……」

「ナニ一步……一步と云へば小さい額が一つ、そんなんなら賽錢の残りが有た筈ぢや……ア、有た

く、それ上げましょ」

「夫れでは此の札を」

「イヤ、そいらん、當つた所で謹か千兩位邪魔臭い」